



道成寺

特別
412
3670
4





早付

是に紀州及成さ乃位格とて
 一も通さるるに
 ありてひきくたし
 仕る人成はほと再無仕
 事さしてふら日者わりて
 領と種乃所業成りて
 みるりふ能方りや

鐘樓へあきくあふく ひを さうん

早鐘樓へあきくあふく ひを さうん

早

と目鐘乃竹書をひくさうりく

よくあふくさうりくあふくあふく

あふくあふくあふくあふく ひを さうん

あふくあふくあふくあふく ひを さうん

あふくあふくあふくあふく ひを さうん

詩

あふくあふくあふくあふく ひを さうん

竹書のはひくさうりく ひを さうん

あふくあふくあふくあふく ひを さうん

あふくあふくあふくあふく ひを さうん

あふくあふくあふくあふく ひを さうん

上

あゝいぬのきこられぬひたの
さふきよくわく なよく

女人禁あまの寝るし竹密結
垣ハハのあひんまうしうし
うく祇人 三白 にく祇ハ此國乃
うさりしふすむ由栢子あへん
鐘は竹密ようと葉を舞ハ

ワカ

竹密をおのまきて竹のこく
是ハ又たしお女人ゆはかり
尸のまうとひとふきりて
くるよていほまらうく
中回あらしもの成中る
何より 女人禁あまの寝るし
あまにまふ中付ると

ワカ

ふけ國の傍乃白栴子よふてんわ
うの竹葉をむのまきさてくれよ
こあ〜の竹葉より舞をまのまふ
くさ〜のう神乃侍らむ
ま〜と侍抱へいま〜秋人
〜
志海さ〜秋人様より歌〜

早

ワカ

あすま〜のす〜と あ〜女も
あやほな〜う〜か〜ひ〜
り〜中〜女人の叶中〜
由依〜秋人とも舞子面白う
は舞んは〜葉のち〜あ〜
抱への〜う〜
意嬉〜や海を舞をま〜

早

う神——やま——にちんじんとして
あまのまら——まのいんやひとの

あまの——を志り——うわたりきく
既よ桐子娘し——めくわ 花乃
あふは松をうわ——く 昔うめ
うきやうき——く 乃成乃成
うけたまひりき——めく 御座

たうちをふぶくちうわ真りのさ
かみはとてる成寺とは名法を
たわ 也山寺のや 妻は夕昔
きくく 映ハ 入 逢乃鐘よ花う
あくるく 志願ふく
寺にけり月夜を留て雲ゆき
天ふらうき 何程あくひたの

下二一、二五二、一三三、一七二、一
さ乃江村乃漁火也ふたし
ひく、福也まひよき際
あまふやうもて聴らひよわて
清うんととぎわおもへは鐘
恨めしやとて就双よ糸絛け
飛とう見えしひきのしきさう
う勢ふき、言決るりか換の

伐をあてあう望く女人葉あ乃
うーアていよ、あ事、あをあ
なふく皆、あうわうわん
うか鐘、うし、うし、女人葉あ
うは、うい、うれ乃い、うは、うは、う
うや、うな、うよ、うあ、うさ、うら、うは、う
うを、うを、うを、うを、うを、うを、うを、うを

〇んころよはものかふるく
 昔は〇んころに於て國と
 夫ありは者一人の息女をも
 又そは真ふの體聖へ年ま
 ける山伏のまゝに在國の
 昔は〇んころに於て國と
 夫ありは者一人の息女をも
 又そは真ふの體聖へ年ま

〇んころよはものかふるく
 昔は〇んころに於て國と
 夫ありは者一人の息女をも
 又そは真ふの體聖へ年ま
 ける山伏のまゝに在國の
 昔は〇んころに於て國と
 夫ありは者一人の息女をも
 又そは真ふの體聖へ年ま

新ぶうらうかきくしたまうくと
中——のいおぼむかかきよかか
きあ——ぬよ——よまかあ——あ
かかかかかひんかかかかか
ひ——ろ——たのむよ——ろ——い
浸すくかかかかかかかかか
おろ——うむらよ——かかかか

か——をく——はか——山伏を
ろくろく——とく——遊かかかか
ひた。川のあかかかかか
川が上下な。かかかかかか
海かかかかかかかかかか
川をさすく。かかかかかか
かかかかかかかかかかか

ひたの河原にまきこけのひ
はくともり者乃法力はく
へ美あり皆一回小部をあき
東方王法三世の王南方り
軍荼利契又の王西方大南
徳明王小方小蓋妙契又の王
中央大日大住不動うこく
早

動のぬりまはくの曇後三受法
持田羅南於多摩河嚙遮那婆
多那味多羅味干結於我説者
乃大智恵之我弟夫乃成佛と
と子地才成いのるう魚ハ河乃
眼ののあひ乃法きくあり
すいくりこころ新蓮咲く
青

ひきやててよ千子の乃羅尼
不動の極致得明主の火窟
悪くあわなてういの里くる
い乃わいの運流りては鐘
空きつてひくことおる
をとあうるくかちとあく
鐘機よひとあきくわあよん
下

下
勉誠のあつれ
才多新清浄徳徳両方白
謹法中央黄体黄就一大三子大
子世果乃恒河乃我之集照納受
あひまん白徳乃見まをる
い所くよ大勉乃あかへ
新更新く秋う川とまはあり
下

下
あしおのあははきんさるあはら
うむむのほてはくいき
下
極火ゆなつてうけかげんく
ひたりの川なす源割よ恐てう
つるりくるのう思うわぬと
下
真老たちい我本持よろしく
くふく

